

# 紘彬（4歳）、倫彬（3歳）、紗彬（1歳） 三人はわたしたち夫婦の すべてでした。

大上哲央さんかおりさん夫妻

愛おしくてたまらなかつた幼い3人の存在。そこにみんながいるだけで幸せでした。その大上さん家族のすべてを奪った飲酒事故。今回、本紙の趣旨をご理解いただき、事故後初めて、「自身の声で真相を語っていただきました。」

平日いつも帰りが遅い夫・哲央さんの業しみは3人の寝顔にチユッと口づけをする。家にいない分、週に1日しかない休日の日曜には家族みんなでいろんな場所に行きました。哲央さんが運転するRV車は、大上家の第二の家。休みがまとめてこれた日は、九州各地はもちろんです。妻・かおりさんの実家がある長野県や、北は北海道の最北端まで走りました。

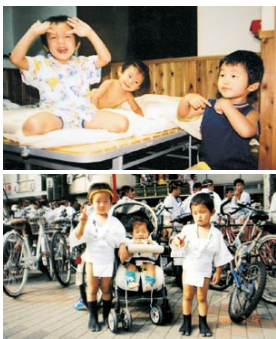
建設現場で重機を操る哲央さんの姿は、子どもたちのあこがれでした。長男・紘彬くんが幼稚園で描いた似顔絵には、「おとうさんのぜんぶがすき、ぜんぶがこいひ」と書かれています。普段、家を留守にしがちな哲央さんは、幼稚園でその言葉を見た瞬間、涙があふれたといいます。

妻・かおりさん、プロボウズの時「子どもはたくさん産んでいいですか」と聞き返しました。いいよ、と哲央さんの返事に、かおりさんも喜んでうなずきました。



みんな家族で過ごす週末を楽しみにしていました。

平成13年1月17日、かおりさんは待望の赤ちゃんを身ごもります。病院の先生の「おめでたうございます」という言葉に、涙が止まりませんでした。不妊治療に通った未だ授かった命でした。その後、切迫流産になりかけたわりも激しく、1か月で14kgも体重が減るなかで迎えた9月13日、陣痛が始まりました。



左から紘彬くん、紗彬ちゃん、倫彬くん。3人と大上の仲良しで山笠好き。毎日夕飯づくりも手伝っています。

転する車に乗り、家族みんなで志賀島で昆虫採集をするのをいつも楽しみにしていました。カプトムシをつかまえては、虫かごを大事そうに抱えていました。

「カプトムシはお盆で終わりだよ」妻・かおりさんは、あまりに夢中な2人に、笑いながらそう言い聞かせました。

お盆の8月14日には、昆虫ワールドカップ2006が開かれていた北九州市の、いのちのたび博物館に、家族で出かけました。

ものすごい衝撃の後、気がついたらすでに真つ暗な海の中。哲央さんは、ほぼおぼれた状態のまま水面に出ました。「水」、死ね、助けなさい、と、そう我に返つた妻・かおりさんは、自分の足の下に車があるのを感じ、とうとう溺ります。しかし、車の上下左右もわからない真つ暗な状態。破損して空いた車体部分を手探りで見つけ、手を伸ばすと紗彬ちゃんの手やイルドシートに触れました。そのまま抱いて、車をすり抜けるようにして海面へ。哲央さんが受け取り、また、かおりさんは滑って、手探りであと2人の子を探しました。柔らかい体に触

れたので、そのまま抱きかかえ、海面でもつと倫彬くんだとわかりました。その間、哲央さんは紗彬ちゃんを立ち泳ぎのまま人工呼吸。かおりさんは倫彬くんを哲央さんに託し、哲央さんの「息を吹き返したよ」という声を聞いて、また、海へと溺りました。

「紘彬、お願いだから、お母さんの手に触れて、祈るような気持ちで、車内のあちこちを手で探り続けました。しかし、紘彬くんは手に触れませんでした。かおりさんが4回目に着うたとき、車は無惨にも海底へと沈んでいきました。泡を出しながら車がぐと遠くまで落ちていきました。夫は流されて2人の子を抱えたまま沈んでいました。もう1回滑って、紘彬を救出しますが、溺れている3人を助けるか、どこかを選ぼうしありませんでした。」

かおりさんが抱き、子どものおこを肩に乗せるようにして橋のたもとを目指しました。「生きて、生きてよ。かおりさんが声をかけました。そのとき倫彬くんははまだ息をしていました。ようやく橋脚付近にたどり着きましたが、滑って上へはあがれませんが、いつもの倫じやない。倫彬くんは肩の上でウツタリとなり、息も感じなくなっていました。」



いのちのたび博物館で世界の昆虫に大はしゃぎでした。

その後、通りかかった漁船に助けられ、かおりさんは、紗彬ちゃんを救急車で同じ病院へ運ばれました。「救急車の中で紗彬を見ただけでダメだと思いましたが、だげと認めたくはなかった。生きていた可能性の高い倫彬の病院へ行ったけど、着いたらすでに亡くなったよ」と聞かれました。「みんな死んじゃった。みんなダメなの」と、受け入れられませんでした。みんな苦しかったけど、もっと、ずっと一緒に生きて良かった。」

「このまま時が止まればいいのに」  
毎日が幸せで、夫婦の口ぐせでした。

「たくさん子どもが欲しいと言いたけれど、この世にこんなに苦しいことがあるとは思いませんでした。でも、紘彬が生まれたとき、はじめておっぱいをぶくませたとき、小さな紘彬を抱いたとき、その二つどこの出来事が苦しかった陣痛を美しいものへと変えていきまされた。通り過ぎるあの人も、あの人も、出産された人なんだ」という尊敬の気持ち、女性に生まれてきたこと、わたし自身がこの世に誕生できたこと、生きているのがこんなに幸せだと感じたこと。今まで通り過ぎてしまっていたことにふと立ち止まって考える機会を与えてくれた紘彬に感謝、感動し、愛おしいこの子を大切に育てようと思いました。子ども

も話をするときには寄り添うような声かけをしよう。子どもの視線に立って、一緒に驚いたり、泣いたりしたい。できる限り抱きしめて、ほおずりやキスをし、頭をなでよう。布おむつで、声をかけ、目をかけ、手をかけよう。絵本もたくさん読もう。たくさんのお話でいいです。」

その後、倫彬くん、紗彬ちゃんが生まれ、その想いは膨らむ一方でした。毎日が幸せで「このまま時が止まればいいのに」という会話が、いつしか夫婦の口癖になっていました。そして平成18年夏、子どもたちはすくすくと成長し、紘彬くんは4歳、倫彬くんは3歳、カプトムシとりに夢中でした。哲央さんが運

日は福智町の隣、田川市内で夕食をとり、家路につきました。事故の11日前のことでした。8月25日金曜日、夜9時、この夏最後のカプトムシとりに志賀島へ出かけました。「また連れて行ってくれるの？」紘彬くんはうれしそうに目を輝かせました。たまたま土曜日は哲央さんの休みがとれたので、翌日から家族みんなで阿蘇へキャンプに行く予定でした。その帰り道、福岡市東区の「海の大道大橋」での事故に遭ったのです。

## 最期に紘彬くんも抱きしめてあげたかった。ずっと一緒に生きて良かった。

すぶぬれのまま、裸足で、かおりさんは立ちつくしました。

「最期に紘彬くんも抱きしめてあげたかった。みんなで家に帰りたいかった。」

「絶対に家族を守るんだという一心でした。3人はわたしたち夫婦のすべてでした。」

事故を起こしたのは、今林大被告。当時22歳で福岡市の職員です。酒を飲んで車を運転し、大上さんの幼い命を奪ったのです。これからはもうずっと一緒に過すはずだった時間。大上さん家族の幸せな時間は、あまりにも身勝手な行為で止められてしまいました。つながっていくはずだった命が、絶ち切られました。

今林被告は、救助もせず現場から逃走。知人に水を依頼し、数リットルを飲んでたことも後日報じられました。飲酒運転というしかも地方公務員による殺人的行為でした。



大上哲央さん(34歳)とかおりさん(30歳)夫妻。胸で寝ているのは、今年9月16日に誕生した長子ちゃん。